

14 あんず
 地域慣行基準
 【化学肥料】

区 分	窒素成分量 【kg/10a】	備 考
県下全域	12	

(1) 特徴及び吸収特性

あんずは、ももなどと同様極めて酸素要求度の高い樹種であり、排水と通気性のよい砂壤土～壤土が適している。

吸肥力が強い果樹なので、土壌管理法は草との養分競合を避けるため、樹冠下は清耕法またはマルチ法による管理が望ましい。**マルチ資材としては麦わら、稲わら、刈草等**が手に入りやすい。部分草生の草種はベントグラス類やブルーグラス類のような、草丈が短く、刈り取り回数の少ないものが適している。

若木時代は樹間の拡大を急ぐあまり、施肥量が多くなりがちとなる。特に窒素の施肥量が多いと樹は軟弱徒長し、凍害を受けたり、胴枯病に犯されやすく、欠株発生の原因となる。

(2) 標準的な施肥法

基肥の窒素は年間施肥量の80%、リン酸、カリは全量を施肥する。**施肥時期は11月～3月とし、有機質肥料は**分解に一定の時間を要するので、**早めに施肥**すると良い。

なお、砂質土壌や積雪の多い地域など肥料の流亡が懸念される場合は、基肥の肥料を分施する。80%を11月に、20%を3月に施用する。

追肥の施用時期は、収穫後の7月下旬に速効性の窒素肥料を施用する。追肥量は**年間窒素施肥量の20%**とし、樹勢をみながら調整する。あんずは主に砂礫質の傾斜地で栽培されているので、地力維持のために有機物の補給が重要である。バーク堆肥や稲わらなどC/N比が比較的高い有機物を、毎年1 t/10a程度投入する。